―大貫 稔教授のご退職を迎えて―

社会福祉学科 学科長　秋　元　　樹

大貫稔先生が本年３月末日をもって定年退職されることになりました。大きなエネルギーの塊が突如眼前から消え去るような思いがいたします。

大貫先生は1954年、東京医科歯科大学医学部をご卒業なされ、翌年医師免許を取得、以降、23年間にわたって母校医学部内科学の研究室、同附属病院内科に勤務なされました。1960年には東京医科歯科大学から医学博士の学位を授与されておられます。

1977年、先生は筑波大学社会医学系（看護・リハビリテーション医学）に教授として迎えられました。これは、先生にとっても、また日本の社会医療にとっても大きな転機であったと思われます。今では当然のように言われる医療と保健と福祉の連携への大きなうねりの始まりでした。以降、今日まで、大貫先生はこの分野で文字通り「先駆者」として活躍を続けられて参りました。

内科内分泌関係で始められた先生のご研究の業績については今さらここで繰り返すまでもありますまい。しかし、先生の最大の貢献は、おそらく学問と実践のコミュニケーター、あるいは文字通り余人をもって代え難いプラクティショナーとしての貢献ではなかったかと思われます。筑波大学において社会医学分野における後継医師の育成に情熱を注がれました。成人病、難病、チーム医療・地域医療等々についての学問と実践をつないだ数多くの著書、論文、調査報告書を出されておられます。日本農村医学会、日本プライマリ・ケア学会、日本公衆衛生学会、日本健康保険医学会、日本内科学会、日本リハビリテーション医学会等、会員としてまた幹事・評

議員・理事等としての学会でのご活躍もあります。茨城県医師会理事、同県の各種委員もつとめられました。そして、何はともあれ、その今日までのピークは、先生ご自身誇られる古河市福祉の森事業の実現に力を注がれ、1991年以降その顧問をつとめられておられることでしょう。

1991年、筑波大学をご定年1年前にご退職になられ、我が人間社会学部を開設するにあたり、日本女子大学に移られて来られました。授業は、医学知識、社会医学、公衆衛生を担当されてまいりました。翌92年から2年間は大学院文学研究科社会福祉学専攻主任を、1994年から3年間にわたって人間社会学部長をつとめられました。先生の大学におけるマネジメントの才は万人の目を見はらせるものでありました。未だ目白から西生田への移行期にあり、多くのことが固まらずにあった新設学部の中で、ご苦労も多かったことと思われます。しかも、その間、私たち後輩への気配りもなされながら。

先生のアイデンティティはおそらく医師としてのそれであろうかと思われます。しかし、社会福祉の方から見させていただくならば、先生は日本にはあまり見られない、しかしある意味では典型的な、しかも模範的な、輝けるコミュニティ・ソーシャルワーカーそのものであられたと思われます。

私たちは大貫稔先生を我が社会福祉学科にもったことを誇りとします。

Ever Onward！ 大貫先生にぴたりの言葉と思われます。